

《論説》

# 日本人作家と植民地アルジェリア

茨木博史

## 1

いまさら言うまでもないことだが、幕末明治維新以来、我が国は文化、技術、政治、社会、のおよそあらゆる分野で西洋のモデルを吸収しようと努めてきた。「文明開化」の掛け声が指す「文明」とは西洋のそれを指していたことも言わずがなである。様々な矛盾や深刻な混乱を抱え込みながらも、官民の指導者層が西洋化を急いだのは、当時の世界情勢への危機感からであった。一九世紀末当時、西洋の植民地主義は絶頂期を迎えようとしており、地球の大半がその支配を受け、二千年来のアジアの盟主ともいえる中国までもが「列強」に侵されようとしていた。西洋の脅威から日本の独立を守るためには「洋才」を自らのものとするより他なかつたのである。

幕末に駐日フランス公使レオン・ロッシユやその通訳メルメ・カシオンと交流を持ち、後には外国奉行として自らも渡仏した栗本鋤雲はナポレオン三世の治政について、「片言以て訟を断む可しとは、必ず子路の賢にして然る後得べきことにて、庸才凡智の敢て跂及する所

に非らず。況や情なき者其辞を尽すを得ず。必ずや訟無からしめん乎の場合に至りては、真に空前絶後、孔子の聖の外迪も夢見する事不能と思ひしに、今、法帝ナポレランの政令は殆ど夫に類することあり。実に驚歎欽羨に堪へざるなり」と賞賛し、それを可能ならしめているのがナポレオン法典の存在であると説いている。中国（漢学）から西洋（洋学）へ、日本の指導者層の攻究すべき知識の対象が大きく転換していかんとするさまを伝える、ドラマチックな一節といえよう。彼はさらに、ナポレオン法典や、日本のアジアにおける地位について、ロッシユとカシオンとの興味深いやりとりも書き残している。

法公使魯節<sup>ロッシユ</sup>、横浜に在る日、常に我国風俗の美を賞し、亞細亞第一の美国、支那・印度の遠く及ぶ所に非ずとし、且支那は人身に譬うれば老羸の極にして薬石の力既に救療する所に非ずとし、我国は少壮の人稍々風寒の患を冒する如く、纔に調護を加ふれば乍ち強健其始に倍するの説あり。余毎聴に信ぜず、以て諛詞とせり<sup>2</sup>。

世辞の中にも当時の西洋人の尊大さがうかがえるロツシユの言葉であるが、はじめはそれを信じなかつた鋤雲も、自らが渡仏した際にマルセイユと横浜の二港だけは盗難に遭う心配がなく船の窓や戸を開放して碇泊できたという事実を思い出して意見を変える。

唯此一事、亦以て政令嚴肅・風俗淳美を知るの兆なり。是、我国海外に航する無慮数百人の周く知るところにして、余が一家言に非ざれば、魯節ロツシユの東方第一美国の言、決して諛詞に非ず。果たして然らんに、譬へ戟レ手誓レ天の事無と雖ども、声と色とを大にせずして、漢竺漢渝渝盟食レ言の陋を圧するに足る可し。新定律書、豈其れ借り用ひざるべけんや<sup>3</sup>。

「漢竺漢渝渝盟食レ言の陋」とは、インド人は西洋人に比べて不誠実で「天を偽り誓を忽にする」からナポレオン法典を東洋諸国がそのまま用いるのは難しい、という内容のことを、先にカシオンに言われたのを承けて出てきた文言である。「新定律書」とはナポレオン法典を指しており、鋤雲はここで、日本には他のアジアの国に先駆けて西洋の進んだ制度を取り入れる能力があり、中国やインドを凌ぐ「東方第一美国」となるべきだと述べているのだ。

自らを「文明」とし、外部の広大な地域オリエントに「東洋」を「未開」や「野蛮」と呼んで蔑視する当時の西洋の尊大な世界像を、半ば内面化して受け容れる日本の知識人の言は、もちろん鋤雲にかぎらず、同様の例は枚挙にいとまがない。それはまさに時代の精神であつたと言える。西洋化を通じてアジアの筆頭国になろうという野心はやがて現実化し、鋤雲はその最晩年に日清戦争の勝利を目にすることになるだろ

う。つづく日露戦争にも勝った日本は、自らも「列強」の仲間入りをし、植民地を持つようになっていく。もつとも、当然のことながら、日本は西洋に完全に同一化できるわけではない。「東洋」を蔑視する世界像を移入するも、自らもその「東洋」の国であることから逃れられない。西洋に対する憧憬と反発、「東洋」に対する蔑視と共感、という両義的な感情が錯綜して、日本人の世界像、特に「東洋」に対するそれは、複雑な屈折と陰影を含んだものとなっていった。このような日本人の世界像については、既に多くの研究が存在している。例えば、日本人の抱くアフリカ像の変遷については藤田みどりの著作に詳しい<sup>4</sup>。

本稿は、フランスの植民地であつたアルジェリアが言及されているいくつかの文学作品を分析することで、近代日本の文学者、知識人たちが抱いていた世界像について、ささやかな論考を付け加えようと試みるものである。取り上げられる文学作品は、犬養健『亞刺比亞人エルフアイ』、堀田善衛『スフィンクス』『あるヴェトナム人』、大江健三郎『喝采』『叫び声』『われらの時代』、である。アルジェリアを主題に選択したことには、おもに二つの理由がある。一つ目は、アルジェリアが、近代日本において英米とともに最も強い憧憬の対象となつたフランスの植民地であつたことである。先に栗本鋤雲の著作を引用したが、彼と交流したレオン・ロツシユは、駐日公使となる以前には、アルジェリアにおいて、フランスに抵抗するアルジェリア人の首領アブデルカデルとの交渉役を務めた人物であつた。ちょうど幕末から明治の始めの時期が、フランスによるアルジェリア全土の支配が完遂されようとしていた時期であり、福沢諭吉の『世界国尽』にも、短いアルジェリアの植民地化に関する記述がある。

二つ目は、戦後、アルジェリアの独立闘争が、ナセルのスエズ紛争やヴェトナム戦争などと並んで日本の知識人や政治的意識の高い若者たちの強い関心と共感を集めたこと、である。これら二つの理由は関連している。近代日本文学の歴史において、フランス文学は特権的な影響力を持っていた。有力な文学者たちの中に大学の仏文科出身の者が多く、そのことが明らかにアルジェリアに対する関心が盛り上がった原因の一つをなしている。本稿で取り上げる堀田善衛や大江健三郎、さらに、あとでまたふれるアジア・アフリカ作家会議において、日本代表の中心的なメンバーとして活躍した野間宏も、やはり仏文科の出身である。野間は『現代アラブ文学選』や「現代アラブ小説全集」シリーズの責任編集者も務め、ムハンマド・ディブやムルード・マムリという二人のアルジェリアのフランス語作家の作品を日本に紹介している。他にも、産経新聞の臨時特派員として『アルジェリア戦線従軍記』を書いた村松剛などもいる。

## 2

犬養健の短編『亞刺比亞人エルアファイ』は一九二九年一月に『中央公論』で発表され、同年に第二創作集『南京六月祭』に収められた。新感覚派の運動や、横光利一との親交からの影響からみた、この作品の意義については佐々木さよが論じている。特に、第二創作集全体の表題となっている『南京六月祭』との関係は興味深い。主人公エルアファイは当時フランス領であったアルジェリアのビスクラ、という街出身の被植民者である。彼はオリンピックのマラソンで「フランス代

表」として優勝する。競技後、浴室でくつろいでいると、フランス人の記者がインタビューを取ろうと不躰にそこへ侵入してくる。はじめは驚いたものの、話しているうちに打ち解けたエルアファイは、故郷アルジェリアで作家アンドレ・ジッドと交流した思い出を語り始める。彼はフランスのアルジェリア駐屯軍で伝令卒として働いたことがきっかけとなって長距離走の力をつけ、その後軍隊時代の上司の力添えでオリンピックに召集される。普段は自動車会社の技手として、パリに暮らしているが、その住居は「どうせパッシイといふような場所じやありません」と述べているから、つまり、高級住宅街ではなく、おそらくは決して裕福でない出稼ぎ労働者の多く集まる地区にあるのだろう。このような主人公の経歴にはそれなりのリアリティが備わっている。そして、彼の風貌は「人種学の教へるとほりに黒髪で、面長で、銅色の額が廣かった」とあり、このような「人種学」はむろん今は廃れているものだが、作者がこの人物を造型するにあたって、取材に一定以上の労力をかけたことがうかがえる。

エルアファイが最初にジイドと出会い、近づくのは、少年時代の故郷の街においてである。その際、彼の母親がムスリムではなくキリスト教徒であるという、設定の配慮がなされている。彼は親から「出世のために」とフランス語を習っていた。

そこへ遅れ走せに駆けつけた黒人のボオイが、私を見ると奥さんに説明したのです。「なるほど、この子は親がテュニスでホテル勤めをしてみましたから一寸喋れます。母親は母親で基督教徒ですよ、奥さん。散歩の時にはこの子をお使ひになるのが御便利ですな。こいつは駝鳥のやうにすばしつこいが、いえ、あまり物を

壊したり盗んだり致しません——私は金髪の奥さんの前で全く赤くなりましたよ。拳骨ひと撃ちにそのボオイを撲り倒してやらうかと思つた。が、奥さんは基督教徒の子と聞いて安心したのでせう、それ以来私といふものを覚えてくれました。<sup>7</sup>」

作者は植民地における人種間、宗教間の超え難い隔壁の存在を認識している。エルアファイは自分を「砂と蠅のなかで育つた」と言い、自分や同胞たちを指して何度も「土人」という言葉を使う。西洋人の差別的な決まり文句を被植民者に受け容れさせ、口に出させるといふ、一種の倒錯を作者は犯してしまつてもいる。一方で、主人公には「ボオイを撲り倒してやらうか」と思うような自尊心もある。ジツドはビスクラでのエルアファイとの交流を通じて、いつとき深刻に損ねていた健康を回復させる。これは彼の小説『背徳者』をなぞつてゐる。エルアファイの家で、逃げ出した仔馬を彼が素手で捕まえたとき、ジツドは主人公の手足をさすりながら、「このすんなりした筋肉はどうだらう。君の今つかまえた美しい仔馬の比じゃない」と褒めるが、この思ひ出について、主人公は「正直に云つて私はしばらく厭な気持ちでしたのです」と新聞記者に述懐する<sup>8</sup>。この場面では、やはり『背徳者』に表れているジツドの同性愛への嗜好がおわされっていると読めなくもない。

三年の間交流が途絶えた後、主人公とジツドは、アルジェリア東北部の中心都市コンスタンティーヌで再会する。場所は「スウダン人の出してゐる天幕張りのあやしげなカッフエ」で、エルアファイはアヘンを吸い、そのかたわらで彼の情婦で娼婦でもあるアラブ人女性が踊つてゐるところへ、ステッキをついた「白人の紳士」であるジツド

が現れる。退廃と官能に満ちたこの情景は、西洋のオリエンタリズムがよく表れたものとして必ず取りあげられるドラクロワの絵画、「アルジェの女たち」をすぐに思い出させる。エルアファイははじめその退廃を恥じ、アヘンを隠そうとするが、ジツドに尋ねられると開き直つて、「亞刺比亞人だつて人並みなことはしたくなりますよ。あなた方に、亞刺比亞馬よりより強いなんて珍しがられるのは、もう澤山でさあ！」<sup>10</sup>と食つてかかる。これに対して、ジツドは次のように言う。

「君は亞刺比亞馬に喩えられたのは不平かね。どうしてだらう。僕に云わせれば君が三年前に見せたのは、あれは美しい動物力だ。あれこそ僕たちの先祖傳來の力だよ。文明はあれから溢れて來たのさ、君の今ひどく奉つてゐる文明だがね。——分るかい。僕は神のかほりにこいつを信じてゐるんだ。こいつを信じて快活になるのだ。それで、三年前の君達はそのすばらしい標本ぢやなかつたのかね」<sup>11</sup>

自らの「文明」に倦み、オリエンタリズムの幻影を追いかける西洋人と、「文明」に劣等コンプレックスを持ちながら、自らも「人間」となりたいと望む被植民者との間の、微妙な心理の交錯がここに表れている。

物語の最後、エルアファイの娘が胸を悪くしていることを知つたジツドは、自らの馴染みの医師ジローを紹介する。診察を見守りながら、彼はエルアファイの妻子と自分と医師との間にふと「不思議な親しみを感じた。種族を感じた。「仲間」を感じ」た。

この小説家らしい想像が彼をしばらく無言にした。——彼がエルアファイに教えて、それゆゑにエルアファイが沙漠の中で全身をもって傲慢になつたといふ同じ理由のために、ジッドはその何分かの間巴里のランブラン街の「共同」建物のなかで、すぐ横に立つてゐる混血兒の細君にも増して市民らしく謙譲になつてゐた。<sup>12</sup>

作家のうちにも移入されたオリエンタリズム、ジッドへの尊敬、そして被植民者エルアファイに対する同情、が綯交ぜになつて表れた『亞刺比亞人エルアファイ』という短編は、こうして西洋人と東洋人との間の隔壁が取り除かれ、一つの平等な「種族」あるいは「仲間」となる束の間の夢を現出させて終わっている。

戦後、一九五七年になつて犬養はこの作品の改作を発表している。<sup>13</sup>物語の大きなプロットは同じだが、細部はかなり多くの箇所が書き直されている。例えば、エルアファイがフランス人記者に話すときの口調が、原版の謙譲さが弱まり、対等な者同士のようになつていく。また、「土人」という言葉や、「撲り倒してやらうか」と主人公に思惟したホテルのボオイとのエピソードが削除され、さらに、ジッドとのコンスタンティヌでの再会の場面も、なぜか場所はテュニスに変えられており、エルアファイがジッドに食つてかかる台詞もない。これらの変更は、おそらく戦後の時代の価値観の変化に配慮をして行われたものと思われるが、原版における植民地の描写の生々しさが失われ、残念ながら無味乾燥とした改作になつてしまつたという印象はぬぐえない。

## 3

一九四五年の敗戦は、日本を「列強」の地位から引きずり降ろした。荒廃した国土で、大多数の国民が貧困にあえぎ、「四等国」にまで墮ちたと言われたこともあつた。敗戦とそれに続く連合国による占領統治の経験は、日本は西洋に後れた国であるという、日本人の劣等コンプレックスを再び強めることになつたが、一方では西洋の支配を受ける「東洋」への同情を呼び起こす契機ともなつた。アルジェリアの独立戦争が勃発したのは一九五四年、独立が達成されたのは一九六二年である。この間に、日本は六〇年安保闘争という、最も熱い政治の季節を経過している。それにしても、今日から見ると、アルジェリアの独立闘争への当時の知識人たちの関心と共感の大きさには驚かされる。淡徳三郎はFLN側に立つて、アルジェリア情勢の啓蒙書を次々と書き上げるだけでなく、<sup>14</sup>東京にFLNの臨時政府代表部を置くことに尽力した。彼以外にも鈴木道彦がアルジェリア出征兵士の証言『太陽の影』（一九五八年、共訳）や、アルジェリア生まれのヨーロッパ系知識人ジュール・ロワの『アルジェリア戦争——私は証言する』（一九六一年）を、長谷川四郎はフランス軍の拷問の実態を告発してスキヤンダルを引き起こした、アンリ・アレグの『尋問』（一九五八年）を、フランスでの原著の発表からほとんど間を空けずに、翻訳している。戦後の日本ではサルトルやカミュの実存主義が大いに人気を博していたが、そのサルトルがアルジェリア問題にアンガージュマンしていたことも大きかつた。日本の知識人のアルジェリアに対する態度も、やがて積極的な独立支持の表明へと趨勢が決まっていく。



一九六一年には東京でアジア・アフリカ作家会議の臨時大会が開催され、当時を代表するそうそうたる顔ぶれの作家たちが出席した。アルジェリアからはこのとき、独立前の代表的なフランス語作家のひとりであるマレク・アッダド Malek Haddad が来日している。このアジア・アフリカ作家会議の日本代表として、第一回のインド大会から参加していたのが堀田善衛である。このインドでの体験が、彼にどのような影響を及ぼし、後に「国際作家」へと飛躍するきっかけとなったについては、牧梶郎が論じている<sup>15</sup>。

長編小説『スフィンクス』は、一九六三年の四月から『エコノミスト』誌上に一年にわたって連載された。この作品は一九六二年のパリ、ローザンヌ、カイロ、ボン、マドリッドを舞台にして、アルジェリア戦争の裏で複雑に絡み合う国際情勢を題材としている。主な登場人物はアルジェリア人の友人から手紙を預かったことをきっかけに、独立闘争に積極的に協力していくユネスコ職員の子、戦前から武器の裏取引に関わり、戦後はカイロに住み、自らもムスリムとなった奥田八作、ナチスの残党で、こちらも武器の密輸やスパイ活動を行っているフランツ・アイスラー、そして、FLNの闘士たちである。

国際情勢に関する豊富な知識を駆使し、壮大なスパイ活劇が仕立てられているが、この作品の評価は発表当時からあまり芳しくはないようである。牧梶郎も「堀田の意気込みにもかかわらず、創出された小説世界は拡散的で構造的な厚みに欠け、作品としてのインパクトに弱い<sup>16</sup>」と否定的な判断を下しており、本稿の筆者も同様の印象を抱く。なにより、主人公の日本人女性菊池節子が命の危険を賭してまでFLNの活動に専心する動機がまったく希薄であることが、致命的な欠陥

であると思われる。もっとも、節子に奥田やアイスラーといった実に胡亂な人物を対置し、FLNの武器密輸に重大な役割を果たさせていることに、作者の批評を見るべきかもしれない。アルジェリアの独立闘争は、決して抑圧された人々の無辜なる正義の戦いとしては描かれていないのだ。

植民地主義、帝国主義が一掃される日などは、いったいいつになつたら来るのか、名目だけの独立などは、なんの熱病にも値しないというのが奥田の意見であった。また彼は、遠く遙かな繁栄する日本にのうのうと暮らしていながら、なにがアジア・アフリカだ、と思っていた。ひょっとして、それはかつての大東亜共栄圏熱を裏返しただけのものではないか、とさえ思う。カイロをはじめとしてアフリカの各地でひんぱんに行われる国際会議に出席する日本の学者や文士などにもときにそういうものを見出し、奥田は苦々しく思っていた<sup>17</sup>。

ここには、奥田八作を通じて、あきらかに作者の自己批判を読むことができる。奥田はまた、かつて戦前の日本で、日中戦争が勃発した際にも「仏文科の学生たちは、シナ事変を、ではなくて、しきりにジイドやヴァレリイを論じていた」ことを思い出す場面もある<sup>18</sup>。奥田は反植民地主義闘争についてのナイーヴなロマン主義を常に斥ける存在である。

植民地民族の独立と解放は、それ自体、なるほど正義であり、歴史の必然である。そのことに間違いはない。しかし、その正義と

必然とに、誰が力と、武器を供給してくれるのか。文士やジャーナリストたちの道徳的な支援、世論というのも大切であろうが、それにもまして、直接の今日と明日を守り進めるためには、武器がいる<sup>19)</sup>。

堀田にはもう一つ『あるヴェトナム人』というアルジェリア戦争を題材にした作品がある。作品の持つまとまり、緊張という意味では、こちらの短編の方が評価されるべきかもしれない。無気力な旅行者である「物書き」の日本人男性が、パリに滞在している。ホテルの向かいには植民地の書き手たちの原稿を集めている出版社、P……がある。主人公の旅行者は、ある晩、偶然入ったヴェトナム料理店で、彼が戦時中に世話係をしていたヴェトナム王族の子息の男と再会する。日本軍の仏領インドシナ進駐によって、一時日本に暮らすことになったそのヴェトナム人は、日本の敗戦による帰郷、フランスの復帰、ディエン・ビエン・フーの戦いとフランスの撤退、ホー・チミンの支配、という次々と襲いかかる歴史の転変に翻弄されてきた。そして、今はアルジェリア戦争に揺れるパリで、フランス当局の走狗として、アルジェリア人とOASに対して二重スパイをしている。それは「いちばん汚い仕事」であった。この作品で堀田は、日本がフランスの植民地史のなかで、かつてたしかにひとつの重要な契機となる軍事行動を起こしたこと、日本の戦前と戦後は決して断絶しているわけではなく、一貫して世界との、あるいは、「歴史」との連関の中にあるということ、を示している。

太田昌国は堀田の六〇年代のエッセイを分析して、その「継続する植民地主義」という問題意識を指摘する。大田は、「過去と現在と、

残念ながら、近未来をも刺し貫いて「継続している」植民地主義支配という問題に、堀田は、日本で誰よりも早く気づいた人間のひとりであると思われる」という評価を堀田に与えている<sup>20)</sup>。太田がエッセイについて指摘している問題意識を小説の形で表したのが、この『あるヴェトナム人』だといえるのではないだろうか。

#### 4

アルジェリアの問題は、日本の知識人に、かつての大日本帝国の植民地主義を思い出させたり、あるいは、戦後の日本が置かれているアメリカの植民地的な状況を認識させたりする契機となったようだ。比喩的に言えば、アルジェリアは日本の過去や現在の姿を映し出す鏡のような役割を果たしていたのである。一つずつ例を挙げておくと、一九五八年六月八日号の『週刊朝日』では、「フランスの危機」と題して、崩壊寸前の第四共和制の状況がトップで伝えられているのだが、「パリ発、アルジェ発のニュースが世界を飛び回っている。アルジェリアに対するフランスの立場は、かつての満洲に対する日本のそれにも似通っているようだ」という文章から記事が始まっている。同じ一九五八年の『中央公論』五月号では、フランスで発表禁止となったサルトルの「ひとつの勝利」が翻訳されるとともに、藤野宇内が「沖繩とアルジェリア」という論文を書いている<sup>21)</sup>。見開きの目次には表題の横に一回り小さな文字で「日本人にとって軍事的植民地沖繩の問題は、アジア・アフリカ共通の苦悩を理解する鍵だ」と説明がつけられている。

大江健三郎の最初の小説『奇妙な仕事』が発表されたのが一九五七年であるから、アルジェリア戦争というのは、彼の作家活動のほんの駆け出しの数年間と重なっているだけなのだが、そのわずかな期間に、彼はアルジェリア戦争に言及する小説を三つ書き、また植民地主義を含む政治の問題についても、旺盛に発言を残している。当時の日本が置かれていたアメリカの植民地的状況について、大江は一九五九年の「われらの性の世界」という文章で、「性的人間」という独特のイメージを用いて書いている。彼は、他者との絶えざる抗争を続ける「政治的人間」と、逆にいかなる他者と対立せず、本来的に、他者を持つことすらない「性的人間」という区別を提示し、「そしてこの現代日本安逸の風潮には、政治的人間の闘争心とは別の、性的人間の退嬰的な満足感が濃い影を落としているとぼくは考えるのである。現代日本は、性的人間の国家と化し、巨大な牡アメリカの従属者として屈服し安逸を享樂しているとぼくは考え、逆にこの国での進歩的な政治運動家を見まう困難と不安、かれらのまえの巨大な壁に思いついた」という<sup>22</sup>。実際、彼の初期作品において、主人公の青年は、しばしば、外国人相手の娼婦の情人である。ここに、大江も先の文章の中で追認しているとおおり、アメリカに従属する戦後日本社会あり方の隠喩を見出すことは容易である（ただし、作品に登場する「外国人」は必ずしもアメリカ人だけではないが）。青年と娼婦との生活を規定しているパトロンの外国人は、直接的に青年と敵対するような言動をするわけではない。むしろ、外国人の存在は希薄であるのだが、にもかかわらず、象徴的な力として青年を抑圧している。

『われらの時代』（一九五九年）の主人公靖男も、そんな外国人相手の娼婦の情人に甘んじる大学生である。頼子との関係に倦んでいる彼

は、大学の懸賞論文に当選してフランス留学の権利を得る。それは輝かしい「出発」の機会となるはずのものであった。あるとき、彼は大学の友人で左翼活動家である八木沢を通じて、アラブ人と知り合う。それはアルジェリア独立闘争に関わっている人間であった。そのころ、靖男の弟の滋とそのジャズバンドの仲間たちは、天皇の車列に爆弾を投げ込むというテロを計画する。だが、テロはつまらぬきつかけで失敗に終わり、仲間割れをした康二と在日朝鮮人の高が、投げそこねた爆弾で決闘をして二人とも死んでしまう。アルジェリアでのFLNの闘争と、遙か遠く離れた日本での高の徹底的に不毛な死とが、痛切な対照をなす。やがて、靖男はアラブ人との関係をフランス大使館員に問い糾される。そこで、靖男は倫理的な決定を迫られる。

「あなたがあの人物と友人であったとしてもそれは問わないことにしましょう、あなたがあの人物の反・フランス運動に批判的であり、今後あの人物と協力する意思を持たないと約束してくださいただで結構です」と大使館員がいった。「あなたはonと答えてくれるだけでいい。nonとおっしゃらないことを心から希望します」

おれに裏切れとすすめているのだ、然しておれは今あのアラブ人を裏切ろうとしているのだ、と恐怖を感じながら靖男は考えた。恐怖、おれ自身の卑劣さへの恐怖だ、そしてnonということを出発の輝かしい再生のイメージのすべて、勇気を湧かせる行動へのイメージのすべてを黒くぬりつぶそうとしているおれ自身への恐怖でもある。

「どうですか・oui. non. yes.」

靖男は粘りつく唇を鳥の肛門のようにとがらせ、あの深くこもって甘美な言葉、幸福とか愛とか名誉とか富裕とかの色彩にいろどられる



oni. という言葉を発見しようとした。

「きみがoni. といったとして、それを聞いたぼくは黙っているよ、誰にもいわない」と助手が熱情のこもった眼でかれを見つめながら力づけた。「きみはフランスへ行つて勉強してくるべきだ、きみの一生のためだよ」

靖男は卑劣さの柔らかな粘膜にじんわりつつみこまれようとしてい  
るのだ、かれは不意に覚醒し立ちなおった。

「ぼくはnonといわなければなりません」と靖男はいった。《すべ  
ては終わったのだ》<sup>23</sup>

靖男はあれほど望んでいた「出発」の機会を捨てる。彼が「non」と言ったとして、それが実際にどれほどの価値があったかは疑わしい。だが、常に状況に対して受動的で未成熟な存在であった彼が、唯一見せるこの主体的な倫理の選択は、この作品の中で、最も美しい場面であると、筆者は思う。「われらの時代」というタイトルからしてそうだが、この小説は朝鮮戦争後の好景気の中で急速に勃興しつつあった一九五〇年代末の東京の若者風俗を、戯画的に描きすぎたきらいがある。それを「オトギ話」のようだと言った島尾敏雄や、「クリシエの森」と呼んだ紅野謙介<sup>24</sup>などは、逆説的なやり方で積極的に論じているが、現在に至るまで作品の評価は高いとはいえない。だが、朝鮮戦争の従軍経験を持つていて、仲間から一目置かれていた在日朝鮮人の高が、実は強い人種的な劣等コンプレックスを抱えており、それがためにかつての皇国の臣民時代に郷愁を感じていたり、白人兵との同性愛に耽つたりする様などは、植民地主義が被植民者の心理に及ぼす深刻で複雑な影響を、小説の想像力がとらえた例として、

注目に値するものではあると思う。特に、白人兵との同性愛を希求する、高の倒錯的な心理は、フランツ・ファノンの諸著作にある被植民者の症例を想起させる。

『叫び声』（一九六二年）では、「僕」と呉鷹男、虎、の三人の若者が、百科事典のセールスマンをしているというアメリカ人、ダリウスと共同生活をする。呉鷹男は朝鮮人の父と日本人の母との子であり、虎はアフリカ人と日本人女性との子である。四人はいつの日か友人たち号と名づけたヨットで冒険に旅立つことを夢見ている。だが、ダリウスを保護者としての、三人の若者たちの愉快な遊蕩生活は突然に終わりを告げる。ダリウスが十二歳の少年を誘拐、監禁したかどで逮捕され、日本を出ることになったのだ。共同生活が破綻していく中で、虎はアフリカへ、呉鷹男は北朝鮮へ、旅立つというそれぞれ  
の夢想到沈潜していくことになる。虎は思い立って、横須賀の黒人アメリカ兵を真似て玩具の自動小銃を持って銀行強盗をしようとして撃ち殺される。呉鷹男は「真正の人間」l'homme authentique になることを激しく望む。それは「真正の、その国の人間、本物のその国の人間、間違はなくこの土地の人間」になるという意味であった。虎の死を受け止めて、彼は北朝鮮への渡航ではなく、「おれ自身の中の自分独自の国、自分独自の世界」を手に入れようと妄想するようになる。彼にとつてそれは、強姦殺人人によって「怪物」となること  
であった。女子高校生を殺した彼の裁判で、傍聴席の母親が彼の朝鮮名「呉燦」を叫ぶ。それは突然の、生々しい真実の啓示となる。

その瞬間、呉鷹男は、なぜ自分がこの世界にauthentiqueに生き  
ているという安堵感を持つてできない人間になったかを、なぜこ

の現実世界の私生児となったかを理解する手がかりが自分にあたえられたのを感じた。「…」

「呉燦……」ともういちど母親が叫んだ。そのとき、自分の突然の怒りにふるえる指に扼殺されたあの不運な娘が流した、ひとしずくの涙が、澄みわたって眠る幼児のそのような静かな頭に、実に鮮明によみがえった。独房の生活で彼はそれまでずっと怪物の本質について荒あらしく考えてきたのだったが、いまからあとは死刑の夜明けのいたるまで、そのひとしずくの涙のおだやかな光のもとに、短く区切られた残りの生涯を生きるだろうと呉鷹男は予感した。<sup>26</sup>

ただひとり残った「僕」は、日本を離れたダリウスの手紙に誘われて、パリへとたどり着く。それは「僕」がついに出発の夢を叶える瞬間なのか。そうではなかった。パリで再会したダリウスはもはや倒錯した性的趣味を隠そうとはしなかった。

僕は自分がなぜパリでダリウス・セルベゾフと会うことに憂鬱な予感をあじわい、フロレンスやアテネ、ローマでの日々をなにごとかからの執行猶予と考えていたかという無意識の動機を明確に理解した。おそらく僕はダリウス・セルベゾフがこれから僕を説得し受けいれさせるひとつの行為のためにこの夜明けのパリまでの永い旅を行ったのだ。

不意に遠方ですさまじい炸裂音がひびき、人間の叫び声が永くそのあとにつづいた。ダリウス・セルベゾフは鬱屈したように黙りこみ僕を悲しげに見つめていた。睡っていた恋人たちも一瞬間をあけて見合わせ、そしてつぶやくように低い声で、どちらかの

唇が《プラスチック！》といった、深夜にしかけられたOASのプラスチック爆弾が遅れて破裂したのだろう。そして誰かが傷ついたのだろう。叫び声はいちど沈黙し再び永く続いてから、完全に夜明けの空に吸い込まれた。<sup>26</sup>

ダリウスのおぞましい欲望が、フランス帝国主義の暴力が猖獗するパリの情景と重ね合わされた、見事な場面である。「僕」はたつたひとりでその西洋帝国主義の暴力の世界に立ち向かわなければならぬ。

『喝采』（一九五八年）は大江の初期作品の中で異色のものと言える。ここでは青年主人公がフランス人リュシアンと同性愛関係にある。日本人青年、夏男がなぜそのような関係が続いているのかは明確ではない。彼ははじめから去勢された存在としてあり、フランスの植民地政策に抗議する夏男の大学の学生たちを「黄色の小男ども」と呼んで蔑むリュシアンに従属させられている。そんななか、娼婦の康子がリュシアンと夏男の間に入り込む。奇妙な共同生活を送るなかで、夏男は康子に導かれて女性に対する不能から回復する。康子に救いを見出し、夏男はリュシアンから逃れようとするが、阻止され、康子が狡猾に追い出されてしまう。リュシアンに裸にされ、親が子にするように「山羊の頭と紫色の花を刺繍したビジャマ」を着せられながら、夏男は屈辱に甘んじてしまう。<sup>27</sup>

このように、大江の小説作品がアルジェリア問題に触れるとき、それは決してヒロイズムやロマンチズムの対象としてではない。日本からの脱出に希望を賭けようとする試みは、常に裏切られる。アルジェリアの問題は、類比や対比によって日本における植民地的状況を

浮き彫りにするための装置として存在しているのだ。出版社の企画でパリの反OASのデモに加わったり、サルトルにインタビュアしたりした大江だが、彼もまた、FLNの武力闘争を全面的に支持していたわけではなかった。「テロは美しく倫理的か？」と題した文章の中で、カミュの『反抗的人間』を引きながら、彼は次のように深い絶望を吐露している。

帝政ロシアのテロリストたちが投げた爆弾が手工業的な人間味をそなえたものだったとすれば、アルジェの婦人が仕掛ける爆弾は、近代工場の製品らしい破壊力をそなえているし、ベトナムで破裂する爆弾の汚らしさ、恐ろしさは、オートメーション工場の製品に人間の悪意が新工夫をつけくわえて補強したすさまじいかざりのものである。それに抵抗すべき反抗者たちのテロには、テロと弾圧それ自体の論理にしたがって、より汚らしく、より恐ろしい発明がおこなわれつづけざるをえないであろう。

そのような戦いにおいて、結局民衆は勝つという人民戦争の遂行者の確信が反抗者たちの、汚らしく恐ろしい死を、いくらかでも受けいれやすくするとは考えられない。いうまでもなく、かれらの頭上に最新型の爆弾を落とす者たちもまた、同じ汚らしい恐怖にみちた死に、鼻つきあわせているのである。<sup>38</sup>

大江は、アルジェヤサイゴンで行われるテロが、「すでにいかなる意味でも「道徳的」ではありえない」と結論している。

## 結び

「日本人作家と植民地アルジェリア」という主題で、本稿は三人の作家の小説作品をもとに分析した。それぞれの作品は、近代の日本人の世界像が如何様に形成され、表現されるかの資料となるものである。当然のことだが、「純粹」「正確」「客観的」な世界の把握などというものを我々はナイーヴに想定することなどできない。我々の観ている世界の像は、時代の様々な価値観や言説による偏光によって、映し出されたものである。過去の作家たちの描き出したアルジェリアの像のありかたを解明することは、我々自身の世界像のあり方を認識し、再検討することにもつながる。今後、適切なテーマを順次設定していくことで、日本人の抱く世界像とその表象の研究を、さらに包括的なものへと発展させることを課題としたい。

- 1 栗本鋤雲「暁窓追録」、井田進也校注『幕末維新パリ見聞記―成島柳北』『航西日乗』栗本鋤雲「暁窓追録」、岩波文庫、二〇〇九年、所収、一四二頁。
- 2 同右、一四七頁。
- 3 同右、一四八頁。
- 4 藤田みどり「アフリカ「発見」―日本におけるアフリカ像の変遷』、岩波書店、二〇〇五年。
- 5 佐々木さよ「犬養健における「新感覚派」―横光利一との邂逅がもたらしたものの」、紅野敏郎編『新感覚派の文学世界』、名著刊行会、一九八二年、二五九―二八一頁。

- 6 アルジェリア北東部の内陸部の都市で、サハラ砂漠の北端に位置する。
- 7 犬養健『亞刺比亞人エルアフィ』、第二創作集『南京六月祭』、改造社、一九二九年、所収、三二二頁。
- 8 同右、三一九頁。
- 9 アルジェリア北東部の都市。フランスの植民地時代、アルジェリアは西からオラン県、アルジェ県、コンスタンティヌ県に区分され、コンスタンティヌ又は県都であった。現在でもアルジェ、オランに次ぐ同国第三の都市である。
- 10 犬養健、前掲書、三二四頁。
- 11 同右、三二五―三二六頁。
- 12 同右、三三七頁。
- 13 改作版は筑摩書房の『現代日本文学大系』六二卷、一九七三年、に収録されている。
- 14 『アルジェリア問題 フランスはよるめく』、理論社、一九五八年。『アルジェリア革命』、弘文堂、一九六〇年。『アルジェリア解放戦争 F L N (国民解放戦線)の七年半』、青木新書、一九六二年。
- 15 牧梶郎『無常観とアジアの虚無』、『インドで考えたこと』とその前後」、中野信子他『堀田善衛 その文学と思想』、同時代社、二〇〇一年、所収、九九―一四九頁。
- 16 同右、一四四頁。
- 17 堀田善衛『スフィンクス』、集英社文庫、一九七七年、三一五頁。
- 18 同右、三五―一頁。
- 19 同右、三四九頁。
- 20 太田昌国『植民地主義と先住民族―堀田善衛の仕事を媒介に(一六〇年代)再考 精神のリレーのために 第三回』、『インパクション』第一六五号、インパクト出版、二〇〇八年一〇月、所収、一三三―一三三頁。
- 21 『中央公論』一九五八年五月号、中央公論社、一五〇―一五七頁。
- 22 大江健三郎『われらの性の世界』、『厳粛な綱渡り 全エッセイ集』、文藝

- 春秋、一九六五年、所収、二三三―二三三頁。
- 23 大江健三郎『われらの時代』、第一期『大江健三郎全作品』二、新潮社、一九六六年、二九四―二九五頁。
- 24 紅野謙介『われらの時代―ククリシエの森』、『国文学 解釈と研究』、第四二卷三号、学灯社、所収、一九九七年、三八―四四頁。
- 25 大江健三郎『叫び声』、第一期『大江健三郎全作品』五、新潮社、一九六七年、一〇五頁。
- 26 同右、一二六頁。
- 27 大江健三郎『喝采』、第一期『大江健三郎全作品』二、前掲書、七九頁。
- 28 大江健三郎『テロは美しく倫理的か?』、『持続する志 全エッセイ集』二、文藝春秋社、一九六八年、所収、五三四頁。